
SAKIのネタ保管庫

SAKI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SAK Iのネタ保管庫

【Nコード】

N7349S

【作者名】

SAK I

【あらすじ】

これはSAK Iさんのネタ保管庫です。なので更新は稀です

割と知識不足なので文章も適当です

そこを考えたうえご覧ください

S A K Iが考えたオリ主の転生もの。転生編（前書き）

これはS A K Iさんが転生ものを見ていて

「こんなに神が味方するとかおかしくない？」

と書いて書いた話です。

SAK Iが考えたオリ主の転生もの。 転生編

俺は今何故か白い髭のおっさんがいる

なにやら俺に土下座して謝っているがおそらく演技だろう

俺は所謂良家のお嬢様だからそれくらいわかる

…見えないとか言っな

「すまぬ。お主は死ぬはずではなかったのに」

はい、ダウト

目が笑っているぜ、爺さん

「……それで」

「気の毒じゃからお主を転生させる事にした。特殊能力もつける」

そんなことをのたまった。

普通なら天ぷらk t k r、とか言っのだろうが……転生ね。俺は賭の対象か何か……って所か

爺さんの目も心なしか俺を見下しているし

……なんかイライラしてきた。せっかく一浪で横須賀国立に入って友達もできたと思ってた所なのに

俺で遊び終わったら別の被害者が出るんだろうなあ

「お主、さつさとせぬか。3つまでならなんでも能力つけてやるぞ」

爺さんの口調が乱れてきた。……仕方ないな

「わかった。ならば一つ目は刀語の鑢 七実の力」

「わかったぞ」

おそらくデメリットもついてくるだろう。まあ覚悟はしてる

……因みに俺は西尾ファンだ

「その2、あんたから……否、あんたらからの干渉をなくしてくれ」

爺さんが怪訝な顔を始める

「能力じゃなくていいのか」

……問題ない。見稽古でだいたい事足りる

それに……俺の計画にあんたらが絡むと厄介だ

まあそろそろ爺さんも気づいているだろう。だが七実の体ならすぐ死ぬだろう……とでも思っているだろうな

だがな、

「3つ目……俺を東方の藤原 妹紅の一つ上の姉に転生させてくれ」

転生先指定

爺さんは目を見開いて俺を見る

因みに双子にしなかったのは忌み子として殺されないたためだ

爺さんの唸り声が聞こえる

はは、爺さん。俺を遊びに使ったのを悔やめ。

「……良からう。お主の人生に幸多からん事を」

俺の足元に穴が開く

はは、一文字抜けてんじゃないか

俺は必ずここに戻って来てやるぜ

S A K Iがマジに書いた一次小説の冒頭部分（前書き）

題名の通りです。とても稚拙な文章ですのでご注意ください

作者の出身高がもしわかってもしスルーをお願いします

S A K Iがマジに書いた一次小説の冒頭部分

地球は私を中心に回っている

すまない、今の発言を不快に思ったなら取り消そう

地球の中心は核であり自転の中心は地軸である

しかし世界は私を中心に回っている…と口にしてみよう

これは不快に思ったとしても訂正する気はない

何故？まあそうカリカリするな。なら逆に聞こう。

世界と言う物は存在するのかと

ああ、そんなキチガイを見るような目で私を見ないでくれないか。

ソクソクするじゃないか

まあこのさい私の性癖の話は置いておこう

先ほどの答えだ。世界と言う物は個人が形成する物だ

つまり世界の中心は個人であり私も君も世界の中心なのだ

もし君が世界の中心がアメリカだと言うのなら私は君に失望するぞ。

アレは社会の中心であって世界の中心ではない

何故なら君は日常生活においてアメリカを一番に考えるかい？まあ

もし君がアメリカに対する愛国心が高く星条旗さえ見ていれば生き

てられるのなら別だが…

恐らく答えは否であろう。大多数の人間が最も優先して考えるのは

自分の事だ。というよりそう言うふうにできていると言うのが正し

いのだろうな。

とどのつまり生物は自己中心的なのだ

目の前の、歩く非常識はそう言った

長々と450文字以上もそんな事を言った

「…一葉さん、言い訳にそんな哲学的な事を言っても誤魔化されませんからね」

彼女、ヨロイザカ 鎧坂 ヒトハ 一葉先輩は一辺も悪びれる事なく我が物顔で俺のプリンを食べていた。ああ、せっかく駅前のレストランの限定プリンだったのだが

「先ほども言っただろう、まだ解らないのか。つまりは『お前の物は俺の物、俺の物も俺の物、神の物すら俺の物』という事だ」

いい加減わかっただろう、と呆れた顔で一葉さんは俺を見てくる。呆れたいのはこっちの方だ

「いつときますけど、それ…窃盗ですよ」

俺がそういうと彼女はドンツと効果音のつきそうな勢いで自分の足を机に置いた

女の子なのにはしたない、など言っても無駄だろう

「ああ、窃盗だな。だが窃盗とは悪なのだろうか？ああ、法律という言葉は使うなよ。あくまで倫理観で…だ。君は今にも飢えて死にそうな人間がパンを盗った事を言及するかね」

「そんな状況ではないでしょう。」

俺は呆れ混じりの声でそう言った。いつも思うが例えが大袈裟過ぎるだろう

「君は小さな人間だね、そんなんだからプディングを食べられたくらいで怒るのさ」

彼女はやれやれといった感じでそう言う。だったら盗るなよ。面倒クセえよコイツ本当

「まあ私は君と違い寛大な心の持ち主だからな。君が私の事をどのように思っていたとしても関係ない。だから言ってみたまえ」

彼女は微妙に無い胸を張ってそう言った

「…一葉先輩、そんな期待した目で見ないで下さい」

「ふむ、なら私は君から摺っておいた君のパスモで新しいプディングでも買いに行こうか」

「このキチガイ、変態、」

俺がそう言うと彼女は体をくねらせながら俺にこう言った

「ああ、もっとだ、もっと言ってくれたまえよ」

今日も概ね平和である

都立十三高校…

京八電鉄木の頭線雨之山駅から徒歩10分。都心の中でも閑静な住宅街にあるその高校は都立の中では中堅校である。しかしその立地

と環境により受験生に一定の人気を誇っていたりする。卒業生にもさすがに総理大臣になる程の人間こそいないが著名な文人なんかいたりする

なによりその自由な校風が生徒達を束縛することもなくのびのびと学園生活を送ることができる

俺もそんな校風に憧れ今春、栄えある都立十三高生になったのであった

まあ俺の話は少し置いておこう。そんな学校故、多少なりとも不思議な人がいたりする。まあ不思議な人はどの学校にも一人は居るものだが

けっこう回り道をしたが俺の言いたい事は一つだったりする。つ・ま・り「鎧坂 一葉は筋金入りの変人」だという事だ

おそらくこの学校で変人は誰？と質問したら大多数が鎧坂 一葉であると答えるだろう

そんなに変人扱いされる所以はいろいろあるがまずは服装であろう。学校指定のセーラー服の上から黄色いレインコートを常時着用し、わざわざフードまで被っている。本人に問いただしてもあしらわれるだけだ

「御剣君、君が私をこれからどう押し倒すかという事を考えている時に悪いがお客様のようだ。御剣君、扉を開けてやってくれないか？」

「そんな事考えてないですからね」

どうやら俺は長考していたらしい。とりあえず一葉さんの戯言を軽く流しドアを開ける為に立ち上がる

ところどころカビの見える木のドアをキリキリと音をたてながら開ける

「迷える子羊よ。お悩み相談及び楽しい学園生活応援部によつこそ。さあ君の悩み事をこの私に献上したまえ」

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7349s/>

SAKIのネタ保管庫

2011年10月6日16時53分発行